総括

青山学院女子短期大学における女子高等教育
── 宗教教育と教養教育と女子教育 ──

加　納　孝　代

私たちは1950年（昭和25）に開学した青山学院女子短期大学が、これまでどのような教育をおこなってきたかを明らかにしたいと考えて、「青山学院女子短期大学における女子高等教育――宗教教育と教養教育と女子教育――」というプロジェクトを発足させた。青山学院女子短期大学には前身として青山学院女子専門学校があり、そのもとには青山女学院があり、さらにその前の姿を探ると、1874年（明治7）のドーラ・スクーンメーカーが建てた「女子小学校」にたどり着く。いずれも女子のための学校であったが、その140年の道のりの間、教育理念は一貫して「宗教教育」と「教養教育」と「女子教育」にあった。2012年に大きな改組を控えている青山学院女子短期大学にとってもこれまでの歴史と教育理念とその成果を確認することは有意義であると思われた。

代表者の英文学科の加納孝代（教授）は、「青山学院女子短期大学における教養教育」というテーマで、本学の歴史の中で実践されてきた、教養を重んじる教育の成果を検証しようとした。家政学科の鈴木すゞ江（教授）は、「青山学院女子短期大学家政学科卒業生の群像」というテーマで、本学のとくに家政学科で学んだ人々の卒業後の歩みをたどるという計画をたてた。英文学科の梅垣千尋（准教授）は、「女子が高等教育の機会を得るまでの歴史」というテーマで、女子に必要とされる高等教育とはどういうものかをめぐる議論の過程を、英国の例を用いて明らかにしようとした。一般教育科目のシェロ・マイク（准教授）は、「高等教育機関における宗教教育の理念と実際」というテーマで、いわゆる大学のレベルで宗教教育を行うことの意義を探ろうとした。

青山学院女子短期大学の歴史をたどる研究は、総合文化研究所において過去にもたびたびなされてきたが、このプロジェクトでは今までにもまして、人々の生の声を聞こうと努めた。そこで講演会や懇談会や個別インタビューなどの形で、本学の学長経験者、教養学科や芸術学科の学科主任経験者、ならびに各時期にひろくまたがる卒業生の方々から、お話を聞いた。その日時と参加者名の詳細は、加納論文の注に記してある。これらの会合は一例を除いてすべて青山学院内で開かれ、そこにはこのプロジェクトのメンバー全員が、可能な限り出席した。

他方でメンバー内でも、互いのテーマの問題意識と研究の進展度を報告し合うことにして、2009年度には、中間発表会として研究会を三回開いた。そこではそれぞれ

鈴木すゞ江、シェロ・マイク、梅垣千尋がリードして、資料をもとに説明をし、相互にコメントを出し合った。

こうして三つの論文が出来上がった。加納の論文は青山学院女子短期大学において、大学側はどのような教育をしようと計画し、教員と学科体制と事務体制という組織を整えてきたか、また実際に本学に入った学生は何を学び、その内の何が今も残っているかを、語られた言葉の中から抽出し、要約したものである。梅垣論文は、英国の18世紀の女性知識人アナ・バーボールドが、女性にとってほんとうに意味ある教養とは何かを問い続け、それを明らかにするまでの思考の歩みをたどったものである。シェロ論文は、大学という高等教育機関において、当初からキリスト教にもとづく教育を行うことを公言し、それを実践してきた青山学院女子短期大学の宗教教育が、実際に学生にいかに意義あるものとして受け止められてきたかを、学生や卒業生の感想とインタビューから明らかにしたものである。

つづいて鈴木論文は、と書きたいのだが、実は鈴木すゞ江先生は2011年1月に逝去された。このプロジェクトを始めた時、私たちは先生のご体調の悪いことを知らなかった。先生は上述の学長経験者による講演会や本学の卒業生であり本学職員でもあった方々から話をうかがう懇談会などには、ほぼ毎回出席された。このプロジェクト内の「中間発表会」にも毎回参加して、梅垣千尋氏に対しては、氏が論文末尾に記しているように、的確で温かいコメントをして下さった。それは2009年の秋の終りのことである。いつも笑顔で参加し、感想や質問を述べて下さった。会合の録音テープには鈴木先生のちょっと高めの、ちょっとせっかちな感じのする声がそのまま残っている。先生を慕う家政学科の卒業生も大勢いた。鈴木先生はきっとその人々の歩みを愛情を持って追跡し、記述されるおつもりであったのだろう。それが完成したら、どんなにか内容の豊かな論文になったことであろう。鈴木すゞ江先生のお人柄を懐かしく思い、ご体調の悪いことへの配慮を欠いたことを申し訳なく思い、また先生の論文を読むことのできないことを心より悔やむものである。